

運営さん、本番です

田山純一

運野栄助（40）マネージャー  
ジオウヒナ（26）アイドル  
アオヤマウイ（29）アイドル  
タマキアンズ（29）振付師  
乙葉奏（45）社長

## ○ Twitter 画面

『Triより大切なお知らせ』と書かれたツイート。  
いいね、リツイートは共に一桁。

## ○ ライブハウス

まばらな客入り。  
ライブハウス後方、スマホで出演者のエントリー画面に必要項目を入力していく運野栄助（40）。

出演グループ名『Tri』。  
ジャンル『アイドル』  
エントリー完了画面が表示される  
ると室内が暗転。  
軽快な BGM と共に派手なライトが照らす中ジオウヒナ（26）、アオヤマウイ（29）がステージ上に現れる。

乙葉奏（45）から着信。

奏の声「あれ、もしかして今日現場？」

栄助「毎日現場ですよ。何か？」

奏「大変そうだね、土日もないし」

栄助「社長がアイドル部作ったんで

しょう？」

奏の声「今日は順調？」

栄助「まあいつも通りって感じで。で

も先週からアプリでのテレビ通話

を用いた特典会を導入したので：

「

奏の声「利用者は？」

栄助「これから順次」

奏の声「前回の利用人数」

3人のオタクが最前列でサイ

リウムを振っている。

栄助「：：3人です」

奏の声「僕思ったのよ、アイドルっ

て見てる分には可愛いけど実際プ

ロデュースするのは別だなんて」

栄助「そんなの今更じゃないですか」  
奏の声「今ならあの子たちもまだやり直せるって思うんだよね。目が出ないのに30まで続けさせても可哀想じゃない」

ぎこちなく噛み合わないパフ  
オーマンズのヒナとウイ。

栄助「それって」

奏の声「ラストライブくらい大きい箱借りてあげるから、将来のこと考えるよう伝えといて」

栄助「そんないきなり言われても」  
奏の声「これもビジネスだからね」

3人の拍手の中捌けていく二人。  
人。

栄助を押しつけ客が一気に入場してくる。

○レッスンスタジオ（夜）

タマキアンズ（29）の手拍子

に合わせダンスレスンする  
二人。  
息が合わずぶつかる。

ヒナ「うわっ」

ウイ「いったあ……」

溜息をつきながら俯く栄助。

アング「一旦休憩」

ウイ「ね、振付変えませんか？ 二人で

今までのままってやっぱ違和感ある

っていうか」

アング「今までと一緒でミスってて

新しいの入れるまでにどのくらい

かかるのよ、却下！」

ヒナ「でも新メン加入まで待つのも

結構かかりますよね？」

ウイ「募集どのくらい来てるの？」

俯き続ける栄助。

ヒナ「運野さん！」

栄助「はいっ？」

ウイ「また寝不足か？」

栄助「あ、ああ」

ヒナ「新メン候補集まってますか？」

栄助「（視線を逸らし）ぼちぼち、な」

ウイ「全然か」

ヒナ「もうすぐ予選なのに」

栄助「予選？」

ウイ「おいおいちゃんとエントリー

してくれてんだよな？ 戦国アイ

ドルフェス」

スマホでスケジュールを確認

すると予選日が登録されてい

る。

ヒナ「今年こそ絶対フェス出よう！」

ウイ「でかいところ立たないとアイド

ルやってる意味ねーしな。他な

んざ私らで蹴散らしてやるぜ」

手を差し出すヒナに手を重ね

ていくウイ、アンズ。

ヒナ「いくよー！」

ウイ、アンズ「おー！」

ぼーっとしている栄助の手を  
掴み重ねた手に乗せるアンズ。  
全員の視線が栄助に集まる。

栄助「……おー」

× × ×

鞆を持って退室するウイ、ヒ  
ナ。

アンズ「お疲れー」

無言で軽く手を上げる栄助。

アンズ「で、今日どうしたんですか？」

栄助「え？」

アンズ「私だって元アイドルなんで  
マネージャーの様子がおかしけり  
ゃ気づきます。大事な話あった  
んじゃないですか？」

栄助「それは……」

アンズ「解散宣告ですか？」

栄助「なんで？」

アンズ「だってパフォーマンス下手  
だし人気もない。年齢的にも2



0代終了のカウントダウン。オ  
タクって連中は若いのが好きなん  
じゃなく幼くって愛らしいのが頑  
張ってるから金を落とすんです！」  
栄助「みんながみんなじゃないだろ」  
アンズ「大手だって20代半ばで卒  
業するんですよ？ 本人の人生考  
えるなら打倒な判断です」  
栄助「んなこと言ってたって、フェス  
出たいなんて聞いちゃったらい  
出せないじゃん！ 予選前に敗北  
宣言するみたいじゃん！」  
アンズ「運野さんはどうしたいんで  
すか？」  
栄助「俺の意見必要？」  
アンズ「マネージャーだってメンバ  
ーの一人です。一人でも違うほ  
うを向いてたら前に進めない」  
栄助「正直わからない。でも、半  
ばで機会さえ奪われるのは俺は嫌

だ」

アンズ「ならまずは何んとかフェスマでは引き延ばしてください」

栄助「結果さえ出せりゃ交渉の余地はあるかもしれないけど」

アンズ「出すんです結果！ 人の真

似でも何でもして」

栄助「何でもって」

アンズ「私なら這おうが泥を啜ろうが上に上がることもだけ信じます」

栄助「って言ったって一人抜けた穴埋めるだけではないっばいっばいな

のにどうしたら？」

アンズ「仮に新メンいても振り覚えるまで時間かかるし」

軽く振りをするアンズを見てパッと笑顔を浮かべる栄助。

栄助「先生がフェスマで期間限定で参加してもらおうわけには」

アンズ「却下。一度引退した人間

がまた舞台に戻るなんて私に費や  
してくれたオタクに悪いし」  
栄助「そんな、最後の希望が……」  
アonz「他に曲もすぐ覚えて、振コ  
ピ出来るオタクみたいなのいれば  
なあ」

栄助「オタク入れるのは面白いかも」  
アonz「んなもんタブーに決まっ  
てんでしょ！」

栄助「すみません……」  
アonz「やっぱ地下じゃオタク以外  
に曲も振りも見てるような人間な  
んてな」

栄助「やっぱダメか……」  
メロディを口ずさむ栄助を思  
わず見つめるアonz。

アonz「……いた」  
栄助「え？」

アonz「栄助の手を掴むアonz。  
いた！」

○ライブハウス・ステージ脇

ジャージ姿の栄助を訝し気に  
見つめるウイとヒナ。

ウイ「まじ？」

栄助「一緒に練習したろ？」

ヒナ「運野さんがわざわざ身体張ら

なくて」

ウイ「中年男なんて見たいオタクい  
ないって」

BGMが流れ出す。

栄助「さ、本番だ」

ウイ「まじか」

ヒナ「うわあ」

栄助「行くぞ！」

BGMの転調に合わせてステ  
ージに飛び出していく三人。

○タイトル・運営さん、本番ですよ

(了)

東京  
都  
板橋区  
大谷口北町  
2  
9  
|  
1  
0